

6 グランドの塗布と燻し



左上から：
刷毛と筆
ホワイトガソリン、灯油
ローラー
プレート・ホルダー
厚板（ベニヤ板）
筆洗用ビン
グラント用空ビン
ビーカー、グラント
ナイロン製ストッキング
ウエス
銅版
テーパー
テスト用の銅板

ここでのグラントの塗布は、液体グラントを刷毛とローラー、それにウォーマーを用いて行う。オーソドックスなエッチング技法には、この方法がよいように思うからである。しかし技法によっては、流し引きが必要になる場合も生じる。例えば、リフトグラントの技法である。また、固形グラントを用いる塗布の仕方もある。ここで言うグラントは、すべてハードグラントであるが、その他にソフトグラントと呼ばれるものがある。

以下に述べるやり方は、グラントの厚みを均一にすることができる。そして再度グラントを塗布した場合、腐蝕でできた溝にグラントがよく詰まり、その溝のエッジの部分もしっかり覆うことができる。それは制作過程で幾度となくグラントを塗布して、腐蝕を繰り返しても版を傷めることが少ない。ちょっとしたコツが必要だが慣れると他のやり方よりもすばやく確実にを行うことができる。



液体グラントの希釈

1. ここで用いるハードグラントは、市販のシャルボネール社製の液体グラントである。ビーカーと広口の空きビンを用意する。そして、グラントをビーカーに適量注ぐ。



2. 市販の液体グラントは、そのまま用いるには濃いのでテレピン油（またはホワイトガソリンやリグロイン）で薄める。



3. 薄めるときは少しずつテレピン油などを注ぎ、テスト用の銅板に筆で塗って濃度を確認しながら求める濃さにする。



4. 望む濃度になったら用意した空ビンにろ過して不純物を取り除く。ろ過にはナイロン製ストッキングまたはシルクスクリーン用のテトロン紗などを用いる。尚、この時点で再度濃度を確認する。必要なら薄くあるいは濃くする。

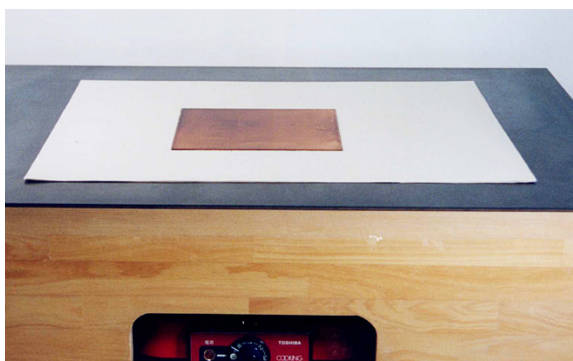


グランドの塗布

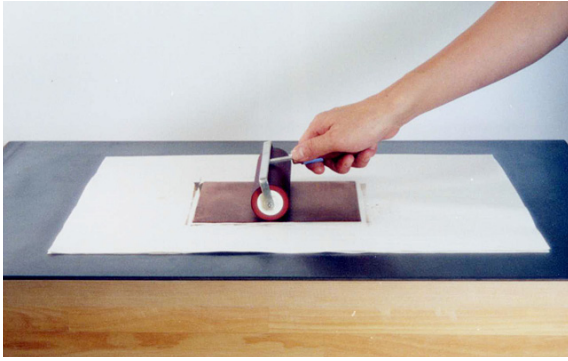
1. グランド塗布の前に、ウォーマーの上にザラ紙か新聞紙を載せ、最小限の熱量で温めておく。この時使用する電熱器にサーモスタット機能があると便利である。



2. 作業台に磨いて脂分を取り除いた版を用意する。このとき版の下に版より小さな厚板などを敷いて塗布すると、版を移動する際に持ちやすい。グランドは刷毛を用いて全面に素早く塗る。刷毛は少しかための毛が抜けないものを使用する。



3. 刷毛で塗り終わったら、グランドには触れないようにしてウォーマーの上に移す。



4. 窪みや疵のないローラーを用いて、グランドの上をゆっくり軽く転がす。最初はローラーが滑り失敗のように感じるが、少し同じ作業を続けていくとグランドがローラーに馴染み、版面のグランドは均一の膜になる。

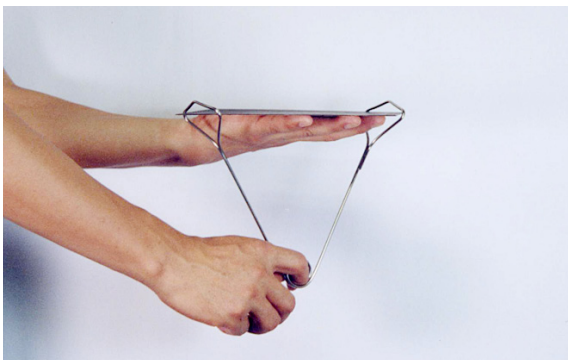


5. ローラーでの作業は、短い時間で素早く行う。初めは思うように行かないかも知れないが、その時はグランドを落とし、ローラーもきれいにし、幾度も試すとよい。版の大きさにもよるが、一度コツをつかむと1分もかからずに塗布することができる。

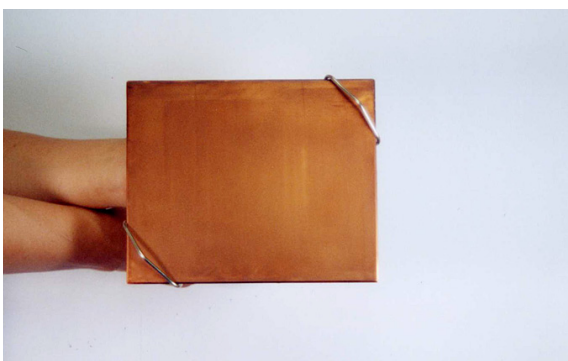


グランドを燻す

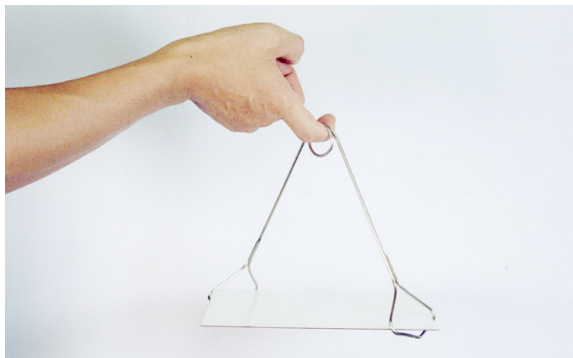
1. グランドが均一になれば、グランドをテーパーで燻す。グランド面を黒く燻すことで、描画のあとを銅板の地肌として見ることができる。その際、写真のようなプレート・ホルダーに挟んで燻すと、グランドを傷つけないですむ。



2. プレート・ホルダーで挟んだら、ホルダーを持つ手の人差指を輪の中に通す。そして、もう片方の手を銅板の裏側に添えてひっくり返す。このとき、銅版とプレートホルダーが接するのは、プレートマークの部分だけである。もし腐蝕前にその部分のグランドがはがれているときは止めニスで覆う。



3. 写真は、版の裏に手を添えて裏返しているところである。



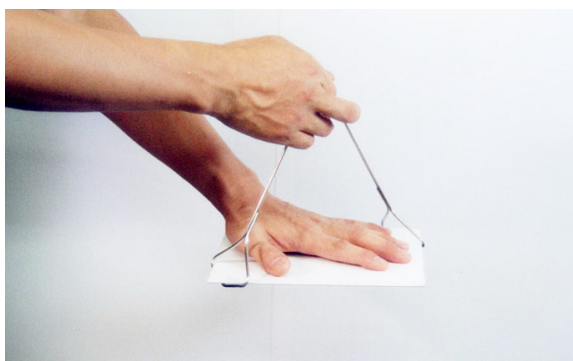
4. 写真は版をひっくり返した状態である。この状態でプレート・ホルダーを換気扇の近くに吊るす。そして、燻す際に床がテーパの溶けたロウで汚れないように版の下に新聞紙を敷く。あるいは、新聞紙を適当な大きさに折り畳んで手に持って受け皿にするとよい。



5. 燻す準備ができれば、燻す前にウォーマーを強く熱しておく。これは燻した煤をグラントに溶け込ませるためである。ウォーマーの上にはザラ紙（または新聞紙）を敷いておく。それから、版を急冷させてグラントを堅牢にするための水を張ったバットを準備する。



6. テーパーは5、6本を束ねて用いる。燻すときは版全体に煤が付着するようにテーパを動かしながら行う。一ヶ所に煤を多く付けると、グラントが防蝕の役目を果たさなくなる。尚、真っすぐなテーパは、ガスレンジの遠火で少し温めて軽く振るとばらけなくて扱い易くなる。



7. 燻し終わったら版の裏に手を添え、グラント面が上になるように再度ひっくり返す。



8. 燻したグラントを傷つけないようにしてプレート・ホルダーを外す。



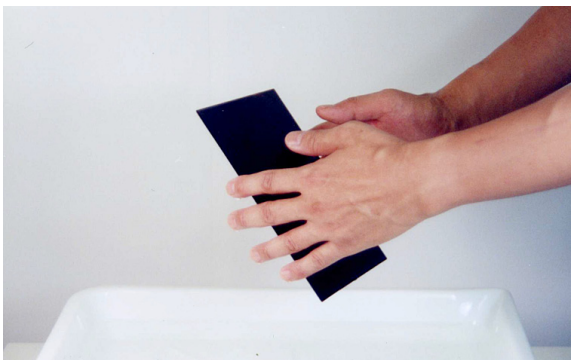
9. 熱しているウォーマーのザラ紙の上に燻した版を置き、ザラ紙ごと版を動かして版全体を熱する。すると版の表面はすぐに豹変して艶を帯びる。表面の煤がグラントに溶け込んで変化したら、グラントに触れないようにザラ紙ごと手前に引いてウォーマーからおろす。この作業は、プレート・ホルダーを使ってガスコンロや電熱器の遠火で熱してもよいだろう。



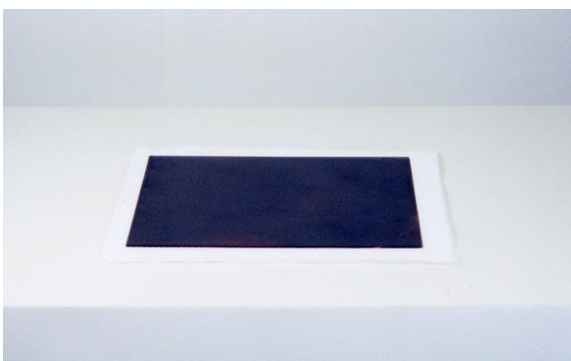
10. グラントを傷めないようにして、版の裏側（粘着シート面）をバットの水の表面にそっと触れさせ、そのままひと呼吸おく。またプレートホルダーを使って燻した煤を定着した場合は、プレートホルダーに挟んだ状態でこの作業を行うとよいだろう。



11. 版を静かに浸けるか、沈める。



12. バットの中からグラントを傷めないように注意しながら版を取りだし、水をきる。適切にグラントが塗布され燻されていたなら、グラント上の水はさっと流れ落ちる。



13. 十分水をきったら、キッチンペーパーを数枚重ねた上に置いて裏側の水気を取る。グラントの上の水滴は、グラントを傷めないようにしてティッシュペーパーで移しとるか、ドライヤーで冷風を当てて取り除く。このあと制作にとりかかる。また、転写が必要な場合は転写を行う。

グラウンドの塗布と燻しについて

1. 制作過程において再度あるいは幾度もグラウンドを塗布する場合は、しっかり版面の脂分を取り除いてから行う。そして、再度グラウンドを塗布するときは最初よりも少し濃くするとよい。
2. また、再度グラウンドを塗布した場合も軽くグラウンド面を燻す。そうすることで新たな描画のあとだけでなく、腐蝕でできた線（溝）も見やすくなる。
3. 版を燻した後の定着にはウォーマーだけでなく、プレート・ホルダーに挟んでガスコンロ及び電熱器の遠火で熱してもよい。また、版を熱して煤をグラウンドに定着させてから水に浸けて急冷する場合は、そのままプレート・ホルダーに挟んで行うとよいだろう。この時も版の裏を水面に触れさせ、ひと呼吸おいてから沈める。その後バットから取りだして水をきり、プレート・ホルダーから外す。
4. サンギン及び弁柄を用いて転写した図柄を定着させるときも、煤の定着と同じように行う。
5. グラウンド液を希釈する溶剤によっては、グラウンドが分離することがある。その時は少し揮発が遅くなるが、テレピン油を用いる。
6. グラウンドを塗布するローラーは、グラウンド専用のものをつくっておくとよい。

グラウンド塗布のローラー及び洗浄の溶剤について

グラウンド塗布に用いるローラーは、窪みや疵のないものを選び、グラウンド塗布専用にする。洗浄溶剤のホワイトガソリンは揮発油のことである。これはガソリンスタンドで求めることができる（無鉛ガソリンを求める）。ベンジンは工業ガソリンの一種で、高度に精製されたもので、リグロインも同じである。ホワイトガソリンは、ベンジンやリグロインに比べて安価であるが銅版画制作に使用するには十分である。それから、常に換気を心がける。



ローラーの掃除

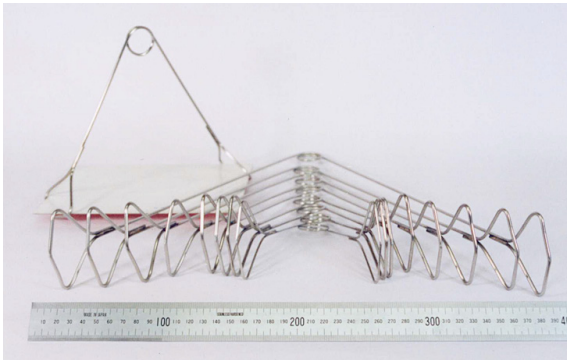
1. ローラーの汚れを取るには、先に揮発の遅い灯油を用いてあらかたの汚れを取る。ザラ紙あるいは新聞紙を数枚重ねた上に、灯油を適量染み込ませる。溶剤を入れる容器は、中栓に小さな穴を開けておくと、振りかけて用いるのに便利である。



2 灯油を染み込ませたザラ紙の上で、ローラーに付着したグラウンドを移し取る。尚、この灯油の臭いや肌に合わないと感じたら、終始ホワイトガソリンでも良いだろう。.



3. さらに、ホワイトガソリンを染み込ませたウエスで丁寧に拭いて汚れを落とす。尚、インキ用のローラーの掃除も同じように行う。



プレート・ホルダー

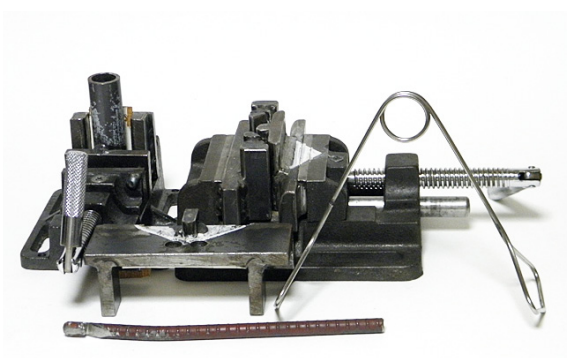
1. グラントを塗布した版は、普通ハンドバイスを用いて燻すのだが、それではグラントを傷つけてしまう。それに、小さい版なら扱いやすいが、大きくなると勝手が悪い。それで、プレート・ホルダーがあれば便利である。写真は自作のプレート・ホルダー。



2. テーパーで燻す際のプレート・ホルダーの使用方法は、グラントを塗布した面を下にして挟み、輪になったところに指を通してぶら下げるか、あるいはフックなどに掛けてつり下げる。また燻した銅版を反対に挟み直し、ガスコンロの遠火で加熱して煤を定着させ、そのままの状態の水を張ったバットに浸けて急冷する。



3. 写真は塗布したグラントをテーパーで燻したものである。このプレートホルダーは、金型を用いてステンレス棒で作り、銅版を挟む部分は銀ロウ付けをしている。尚、銅版とプレート・ホルダーが接触する部分は、プレートマークのみである。また、このホルダーは、アクアチント技法での松脂の溶解定着にも役立つ。



4. 写真はプレート・ホルダー製作のための金型である。プレート・ホルダーは、ここで紹介しているものにこだわることはない。小さなものなら適当な太さの針金で両端に輪をつくり、中央にも指をかける輪をねじってつくとよい。その後、銅版を引かける輪をプレートマークに馴染むようにするとよいだろう。